

第三章 天におられるわたしたちの父よ

父よ、

天から降りてきて下さい。そして、

父祖たちがわたしに教えた祈りをお赦し下さい。

今は平安の内にある貧しい人びとの祈りを。

ひたすら洗い、清めるだけの人びと、

昼夜頭を悩ますことといえ、

何か身につけるものはないだろうかということ、

夜も苦悩のうちに眠れず、祈り、あなたに不足する品々を求め、

不満のつぶやきを弱々しく口にする、そんな人たちの祈りをお赦し下さい。

本当に天にいらっしゃるのであれば、降りてきて下さい。

わたしは、押し込められたこの片隅で飢えに苦しみ、死にかけています。

なぜ生まれてきたのかわからず、

腫^はれてふくれた両の手を見つめています。

わたしには、仕事はおろか、何もあります。

ちよつとでもいい、ここにおりていらつしやつて、

この破れた靴を見て下さい。

この苦痛を、この空腹にへこんだ腹を、

わたしの口にパンの一片も与えようとしないこの町を、

わたしの肉を噛むこの高熱を、見て下さい。

わたしは、雨に打たれ、寒さにふるえ、さいなまれながら、

眠るしかありません。

父よ、わたしにはどうにも理解できないのです。

ここにおりて来て、わたしの魂に触れて下さい。

わたしの心をのぞいて下さい。

わたしは、強盗でも、殺人者でもありません。

わたしは、子供です。

それでも彼らは、わたしを打ちすえ、さらに殴りつけます。

父よ、わたしはわけがわかりません。

そこに本当にいらつしやるのなら、ここに降りてきて下さい。

わたしはあきらめようと努力するのですが、どうしてもできません。

体中が怒りに震え、

つい攻撃の備えをとってしまいます。

そして、のどの奥に血が満ちるまで、泣き叫んでしまうのです。

もうこんなことには耐えられません。わたしにも心があります。

わたしは人間なのです。

どうか、どうか、降りてきて下さい！ あなたは、父よ、ご自分の創られたものをどうなさ

れようというのですか？

舗道の敷石を噛む狂った獣になれとおっしゃるのですか!?

(アルゼンチンの詩人ファン・ゲルマン作)

「職のない男の祈り」

われわれはこれまで、主の祈りについて、われわれの基本的な考え方を述べ、イエスの祈りを生み出した実存的な雰囲気^{アトモスフィア}の再構成を試みた。こうした発想の支えとなっているのは、この世の矛盾によって引き起こされた印象である。すなわち、世界は神の善なる創造によって形成されたにもかかわらず、邪悪な力の抜^はきする世界、われわれの生に苦痛を与え、われわれの希望をくじこうとする世界となっている。神の国とは、この状況と対極にある世界、この状況を逆転させて得られる世界、のことである。それは、暗い苦しみの中に、絶対的な解放の光がさしこむということである。そしてこの王国は、すでにわれわれの間近に迫っており、われわれの仲間の間で現実のものになろうとしている！ 重大な局面がととのえられつつあり、最後の「時」もすぐそこまできているのである。この緊迫し、きわめて緊張度の高い状況のさなか、そして同時に、この世に苦悩と苦痛が満ち満ちているさなかで、イエスはわれわれに天におられるわれわれの御父に祈りを捧げるようにと教えている。

この世が汚濁と矛盾にまみれているのを目のあたりにするとき、われわれはふと、神とは本当に思いやりに満ちた暖かい父親（アッバ）なのであろうかと懷疑する。しかし、この懷疑と反抗に走ろうとする欲望、誘惑を克服するために、われわれは信仰と希望と愛を持たなければならぬ。そしてイエスとともにわたしたちの父よ、と呼びかけ、その名を繰り返すのである。もし、イエスがこのようにわれわれに教え、祈るようにと求めることがなかったら、おそ

らくわれわれはそのような確信と親しみをこめて、「われらの父よ」などとあえて神に語りかけなかったであろう。われわれが主の祈りを唱え、厳しい矛盾に出会いながらも、日々この祈りを生きるというのも、われわれがイエスの無限の希望、汲めども尽きぬ希望を受け継ぐ者だからである。そしてこの生き方は、あらゆる後ろ向きの考え方、逆方向への行動と対立する形のものである。この希望、この確信がわれわれと共にある限り、依然としてこの世が闇につつまれているにしても、それはもはや全く不合理な世界であるということとはなくなってくる。種の危険は相変わらず除去されないかもしれない。しかしこの認識によって、われわれの勇氣は強固なものとなる。

以下、われわれの考察は二つのレベルでおこなわれることになる。まずはじめに追究されるのは、イエスの考えと体験である。⁽²³⁾次に焦点となるのは、現代に生きる人びとの上にのしかかり、その生を不幸にする種々の抑圧的な力との関わりの中で主の祈りを祈ろうとすることである。

御父としての神の体験の普遍性

イエスが教える神の国の中心テーマとなっている、神を父と置く思想は、普遍的なものであり、その発祥を求めるとすると、われわれの心の歴史の中でも最も古い段階に遡ることになる。古いものと、新しいものが二つながらイエスの中に存在している。彼は一方で、広く人間的ものを採用し、それを究極的な高みにまで引き上げるといったことをおこなっているが、また一方で、全く彼独自のもの、イエスにしか見出せない独自のものを提示する。「お父さん」という呼びかけは、すべての人間体験の中で最も古いアーキタイプ（元型）の一つと共鳴するが、それは同時に、イエスが神との間に持った親しさも、他に例を見ない独特な関係であったということを表わしている。

われわれが神を「父」と呼ぶとき、三種の様態でこの呼びかけをおこなっている。すなわち単なる指示名詞の場合、宣言の対象として使われる場合、祈願の相手として使われる場合⁽²⁴⁾。

はじめの様態について言えば、どのような宗教的体験であれ、それが真摯な体験であるなら、神と人間の関係を親と子と見なすのであるが、これは、ここでの主題ではない。宗教的な

人々は彼らの神を自分たちのイメージや姿に似せるのである。こうした人びとは、自分たちを子供と感じ、神を父また母と見なす。⁽²⁵⁾ピグミー族、オーストラリアの先住民^{アボリジニ}、あるいはバンツ族といった原始的な民族から、古代エジプト人、アッシリア人、古代ギリシャ人、ローマ人、インダス川流域に生活した民族など、きわめて高い文明を築いた民族にいたるまで、すべて神を「父」と呼称しているのである。⁽²⁶⁾彼らは、この呼称を通して、自分たちが神に絶対的に依存する存在であるという観念を常に言い表わしていたし、この表現を用いることによって、神に対する侵すことのできない崇敬、無限の信頼を内外に知らしめた。人びとは、自分たちの存在を神に感謝するとともに、子どもが父親や母親と関わるような形で、あるいは若者が年上の人間との間に見出すような関係を、自分と神との間に持ったのである。

もっと原始的な時代には、「父」という表現は、家族というイメージや観念に重要な基盤をもつ生殖や創造と結びつけられることはそれ程多くなかった。その原始的な社会組織は年長者の集団と年少者の集団で構成されており「父」という表現は年長者の権威、権力、知恵の別名であった。だから、ここにおいて、われわれは名誉、尊敬を意味する名称を扱っているのである。

その後、「父」といえば、すべての物の創造者、万物の生みの親の意味を持つこととなった。古代ローマ人たちは、ジュピターならびに他の神々（マールス、サトゥルヌス）を、パテール

・パレンス・エト・ジェニトール（父親にして親、そして生みの親）と見なした。⁽²⁷⁾ ここにおいて神は全世界に君臨する王として現われる。叙事詩『イーリアス』の中でホメロスは、ギリシヤの神の最高神としてゼウスをあげ、「ゼウス、御父、あなたは神と人間を支配しておられる」と述べている。⁽²⁸⁾ また、アリストテレスも、自著『政治学』の中で、こどもたちの上にある父親の力と王の権力は、類似している、と論じている。⁽²⁹⁾

結局、「父」という呼称は、生殖にたずさわり、創造する者、最高の権威者であり、人びとの頂点に立つ者、邪悪で恐れさせる支配者ではなく、親しく優しさにあふれた主人という、これらの二つの活動に照らして理解されなければならない。そこで我々は古代都市ウルのシュメール人たちが月神ナンナをたたえた有名な頌歌で、「わが王は、慈悲深い父であり、地上のすべての生命が彼の手の中にある」と歌い、またマルドゥクを賛美した歌で、「彼の怒りは嵐のようであり、その優しさ、うららかなさは、温厚で慈悲あふれた父親のものである」と歌っているのが理解出来るのである。⁽³⁰⁾ ここにおける神に対する感覚は、イスラエル人たちが神に抱いた思いと全く同質のものであることがわかる。すなわちイスラエル人にとっても、父としての神は、絶対的な権威と無限の慈悲をたたえていたのである。

しかし、イスラエルと、イスラエルにおける信仰、すなわち父としての神と彼らの関係について、いくつかの独特の問題がある。旧約聖書ではすぐに神を父と述べているわけではな

い。ヤハウェを「父」と呼ぶことが稀である——わずか一五回——のを説明するのは難しいことである。⁽³¹⁾ 聖書の執筆者たちは、当時の中東諸国に一般的であった人類学と常に闘っていたのである。当時の中東の人びとは人間の祖先は彼らの信じる神（あるいは神の血筋の者）であり、そうした神とか血筋の者が天国を追われ、地に下って死んだのである、と信じていた。つまり彼らは、人間もまた神的存在であると主張するのである。聖書の信仰は、こうした神的人類学を受け入れる余地はない。それは神と人間を無差別に混同し、けっして神化されてはならないもの（被造物）を神とし、冒瀆されてはならないもの（神）を瀆しているのである。そこで聖書の執筆者たちは、神と人間の関係を言いあらわすのに父と子という言い方をあえて控えたのであった。⁽³²⁾ しかしこうした事情にもかかわらず、イスラエルの民による神の体験を背景とした旧約聖書にはなお、父としての神の姿があちこちに散見される。

そうした発想の底にあるのは、国家の父たちの側らに立ち、彼らが旅をするに際して援助の手を差しのべる神（それが「ヤハウェ」の意味である）の体験であった。こんなところから、その神が「われらの父たちの神」と呼ばれるようになり、アブラハムの、イサクの、そしてヤコブの父、と称された。神はその民と契約を結び、その契約と神聖さを表わす形式として、「モーセの律法」を与えたのであった。彼はまさしく神であったが、他の宗教の歴史と比較して特異である。つまりこの神は、イメージによってではなく、名によって指し示され、かとい

って明確な表示名を持つわけではなく、言外に含意によって、言い表わされた——「わたしはあるという者だ」と。これがヤハウエの眞実の名である。その名前は、想像力に訴えもしなければ、言葉を夢想する表現、つまりシンボリズムにも訴えない。ここにおいて神を擬人化する思想、偶像崇拜が成立するどのような試みもつぼみのうちに摘みとられているわけである。

「もし、彼らがあなたの名を問うたら、わたしは何と答えるべきでしょうか？　神はモーセに『わたしはあるという者だ。イスラエルの人々に、「わたしはある」という方が、わたしをあなたたちに遣わされたのだと言うがよい』とお答えになった」(出三13-14)。以上のことから結論として言えるのは、ヤハウエは当初「父」として体験されてはいなかったということである。

その証拠として、イスラエル民族が他の民族の中から選ばれ、ヤハウエによってエジプトから解放され、またその神が独力で勝たれたという経験によって、彼らは神を「父」と認めるようになったのである。「父」の呼称は、自分たちが一つの民族として生み出された、という意識なしには存在しない言い方なのである。出エジプト記の中で、神自身次のように述べている。「イスラエルはわたしの子、わたしの長子である」(出四22)。イスラエルの方も、自分たちが民族としてあるのは神のおかげであると認めている。「彼(ヤハウエ)は造り主なる父、あなたを造り、堅く立てられた方」(申三二6。このほか民一一12、イザ六三16、六四8、マ

ラ二10などを参照)。

神を父と見る比喩を発展させたのは、預言者たちであった。彼らはこれによって、倫理、道徳の根本、規範を固めていたのである。神を父とあがめるなら、われわれも忠実で従順な子として行動する義務がある、と。しかし、この問題はここで終わらない。神自身が、預言者のことばを通して、自ら父であると宣言するのである。「子は父を、僕は主人を敬うものだ。しかし、わたしが父であるなら、わたしに対する尊敬はどこにあるのか。わたしが主人であるなら、わたしに対する畏れはどこにあるのかと、万軍の主はあなたたちに言われる」(マラ一6)。同様の叱責はエレミヤ書にも示されている。「『あなたはわが父、わたしの若い日の夫』とお前がわたしに呼びかけるのは、今がはじめてだろうか」(エレ三4)。さらに神は「お前は多くの男と淫行にふけた」(三一)とも批判されている。

エレミヤは神の心情を次のようにも描写する。

「わたしは思っていた。

『子らの中でも、お前には何をしようか。

お前に望ましい土地

あらゆる国の中で

最も麗しい地を継がせよう』と。

そして思った。

『わが父と、お前はわたしを呼んでいる。

わたしから離れることはあるまい』と。

だが、妻が夫を欺くように

イスラエルの家よ、お前はわたしを欺いたと主は言われる。」

(エレ三19～20)

また、預言者たちが悔い改めた民に代わって語るときには、恵み深く慈悲深い父としての神の明白な宣言が現われる。

「どうか、天から見下ろし

輝かしく聖なる宮から御覧ください。

どこにあるのですか

あなたの熱情と力強い御業は。

あなたのたぎる思いと憐れみは

抑えられていて、わたしに示されません。

あなたはわたしたちの父です。

アブラハムがわたしたちを見知らず

イスラエルがわたしたちを認めなくても

主よ、あなたはわたしたちの父です。

『わたしたちの贖い主』

これは永遠の昔からあなたの御名です。」

(イザ六三15-16。その他イザ六四8、エレ三4参照)

エレミヤは、神の名において、父としての神の赦しの迅速さを次のように伝える。「エフライムはわたしのかけがえない息子、喜びを与えてくれる子ではないか。彼を退けるたびに、わたしは更に、彼を深く心に留める。彼のゆえに、胸は高鳴り、わたしは彼を憐れまずにはいられないと、主は言われる」(エレ三一20)。また、その優しき、親しみやすさゆえに、神は父だけでなく、母としても描き出されているのがわかる(イザ四九15、六六13参照)。ここにおいてわれわれは家庭における両親と同じ保護を神に見い出す。「まだ幼なかったイスラエルをわたしは愛した。エジプトから彼を呼び出し、わが子とした」(ホセ一一1)。

こうした印象的な事例全てを見てきたが、それにもかかわらず、旧約聖書では神に向けられた「父」という名は決定的といえる域にまでは達していない⁽³³⁾。それはあくまでも、他の名前の中の一つであって、この言い方以上に頻繁に出現し、この言い方以上に重要な名前が沢山ある。たとえば、主、王、裁き人、創造主、などがそれである。「父」という言い方は通常、聖

なる名ヤハウエやあるいはその他の神を表わす名称と共に現われている。誰か特定の一個人の父ではなく、全体として、民族の父にあてはめているように思われる。

神を直接「わたしの父」あるいは「われわれの父」と呼んで祈願する形は、旧約聖書のいかなる祈りの中にも見出すことはできない。⁽³⁴⁾この言葉は、いつか果たさなければならぬ約束があったかのように、つねに間接的である。「彼はわたしに呼びかけるであろう あなたはわたしの父 わたしの神、救いの岩、と」(詩八九27)

この約束はナザレのイエスのためにあったのであり、彼はこの革新をもたらし、かくして、人間個人が神を父と体験する時自ら子供であることに気づくという宗教的関係の最も深い親密さをもたらしたのである。

「アッバ」——イエスの体験の新しさ

神を「アッバ」(最愛の父、おとうさん、パパ)と呼んだことは、歴史上のイエスの最も目立つ特徴の一つである。本来アッバとは、家庭内で幼年時代に用いられる愛情表現のことばであり、大人が口にするにしても、自分自身の父親と尊敬を示したい年長の人々に対して使

われるのである。⁽³⁵⁾ このなじみ深い、平凡なことばを、神に向けて使うなど、誰の頭にも決して思い浮かばないことであつた。それはヤハウエに対して不敬になるだろうし、信仰厚い人々を憤激させたものである。にもかかわらずイエスは、われわれに伝えられている彼の祈りのすべてにおいて、神に「アツバ」(最愛のお父さん)と呼びかけている。福音書の中で、イエスがこの表現を口にするのは、一七〇回にのぼっている(マルコによる福音書に四回、ルカによる福音書に一五回、マタイによる福音書に四二回、ヨハネによる福音書に一〇九回)。そこでギリシャ語の新約聖書は、このアラム語の表現アツバを保存し、このイエスの大胆さの注目すべき手本を記録に留めているのである(ロマ八15、ガラ四6)。

「アツバ」は、イエスと神との親密な関係の秘密と、神の名における彼の使命を暗にほのめかしている。「イエスは、幼な子が父親に甘えるように、無邪気に、親しみを込め、決して疑うことなく、神に(アツバと)語りかけた」⁽³⁶⁾。

もちろんイエスは、イスラエルの民が伝統的に神をどう呼びならわしてきたか、承知していた。「アツバ」を用いたから、彼は神に対する敬意を持っていなかったとか、神に真摯な態度で接していなかったということには決してならない。現にイエスはたとえ話の多くに、神を王として、主人として、裁きの人として、あるいは擁護する方として、示されている。しかし結局、これらはすべて、「おとうさん」という表現に見られる神の比類なき優しき、善意という

大きな虹の弧の下に入る表現である。イエスは、この啓示を神ご自身からさずかっている。「すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに子を知る者はなく、子と、子が示そうと思う者のほかに、父を知る者はいません」(マター一27)。

ヤハウエがその民に与えたこの世の終末に関する約束が、ついに果たされたのである。それは、モーセに明らかにされた神聖四字 YHWH に暗黙のうちに示されている。「それゆえわたしの民はわたしの名を知るであろう。それゆえその日には、わたしが神であることを、『見よ、ここにいる』という者であることを知るようになる」(イザ二6)。(37) ヤハウエという名の意味は、「わたしはここにいる」(わたしがお前とともにある)である。そして、ここで実際に意味されていることが、イエスが神に「おとうさん」と呼びかける今、明らかとなる。すなわち「アツバ」とは、「神はわれわれの間にいらっしゃる。その慈悲、恵み、優しさをたずさえて、われわれの近くに來られる」ことを意味するのである。こどもがおだやかに、安心してすべてを父母の手にまかせるように、われわれも、神の御手にゆだねる。

イエスは、私のおとうさん、とただ一人で神に呼びかけるだけでなく、ご自身が示したのと同じ確信をもって、われらの天の父よと神に呼びかけるようわれわれに教えている。われわれがこのこどもとしての態度で神に近づく時、神の国の扉が開く。「はつきり言っておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」(マター一八3)。

そしてこの御父は、忠実な信仰者だけの御父ではない。詩編一〇三編13に「父がその子を憐れむように、主は、主を畏れる人を憐れんでくださる」とあるように、万人を差別することなく慈愛を施してくださるのである。「いと高き方は、恩を知らない者にも悪人にも、情け深く」（ルカ六35）、「悪人にも善人にも、太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも、雨を降らせてくださる」（マタ五45）のである。

「アッバ」ということばで示される神とのこの近さ、親しさは、神の国の「近さ」と一致する。ゆえに神にあてられた父という名は、神の国の主題に中心があるイエスの教えに深くかわっている。⁽³⁸⁾つまり御父のはからいに対する限りのない信頼と、神の国の大義に対する完全な献身は平行して交わらない問題ではない。反対に自分たちが御父の手の中にあることに気づいて確信を持つようになれば、人びとは、この世での執着から解放され、必要な一事、神の国をひたすら望むようになる（ルカ一二29～31）。助けを与える父という考えは「あなたがたの天の父は〔食べる物、飲む物、着る物が〕あなたがたに必要なことをご存知である」（マタ六32）、すでに、神の国というさらに拡大されたテーマに組み込まれている。この神の国はもう、間近にあつて、イエスのメッセージ、行い、人となりの中に現われはじめたのである。「ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる」（ルカ一二31）。神の慈悲深い善がここに、完全無欠な形で示されている。それは創造の業にだけ及ぶものではなく、

「二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなた方の父のお許しがいなければ、地に落ちることはない。あなた方の髪の毛までも、一本残らず数えられている」(マタイ一〇29-30) 歴史においても、今、原理的に達成されたのである。「小さな群れよ、恐れるな。あなた方の父は喜んで神の国をくださる」(ルカ一二32)。

父なる神——近く、それでもなお遠い存在

イエスの教えに従い、キリスト者が主の祈りをとなえる時、主として、他のすべての物を作った測り知れない神秘の主を考えているわけではない。こうした思いが、完全に念頭から去っているわけではないにしても、少なくともそれが信仰体験の触媒として働くわけではない。イエスによって体験され、使徒たちを通じて私たちに伝えられていることを回復する中に、革新があることを悟らねばならない。——つまりわれわれの悩みや障害に敏感な御心をそなえており、その目はつねに、われわれの苦しみに注がれ、その耳はわれわれの叫びに対して開かれている父なる神であるということである。人は、数字や冷たい宇宙空間に打ち捨てられた砂粒ではなく、神の愛の心を受けて成長する存在なのである。われわれは神の名を知り、その心を心

に刻み込んでいる。そして、この神であり、御父である方のわれわれを思う心に、自分自身をゆだねることができる。今起こりつつあること、あるいは将来起こる事柄は何であれ、われわれにとって良きことであるがゆえに、われわれは生をも死をも神にまかせて委ねることができるのである。

このようにして御父に近づく、われわれは、自分たちが神の息子であり娘であると感じられるようになる。しかし息子であり、娘であるということは、ここでは、因果関係に属することではなく、人は生物学的に御父の子孫であるより、むしろそれは、個人的な関係というカテゴリーに属する事柄なのである。⁽³⁹⁾ 息子や娘である度合は御父への尊敬をもって親しさと信頼の両方を養い育てた程度に依じている。パウロはそのことをよく述べている。

「あなたがたが子であることは、神が、『アツバ、父よ』と叫ぶ御子の霊を、わたしたちの心に送ってくださった事実から分かります。ですから、あなたはもはや奴隷ではなく、子です。子であれば、神によって立てられた相続人でもあるのです」

(ガラ4:6-7)

「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、『アツバ、父よ』と呼ぶのです」

(ロマ8:15)

ここにおいて、新しい共同体、すなわち兄であるイエスを中心とした兄弟姉妹の共同体が出現する。われわれはすべて、御子の中における息子たちであり、娘たちであり、御子イエスと同じように「アッバ！」と呼びかけるようにと促されているのである。

われわれはこれまで、おもに、父という縦の側面に光をあててきたが、次に横の側面である同胞について考えてみたいと思う。われらは共にわれらの父、と祈るのである。孤立した人間など誰一人存在しない。われわれはみんな、御父の国という救いの集団と密接に関わっている。イエス・キリストの御父は、ある人々の御父であるということではない。全ての人、とりわけ貧しく、社会の底辺にいる人びとの御父であり、こうした人びとにこそおられる（マタ二五・34〜45）。そしてこうした人びとに、つまり日々のパンを求めてひんばんに神を呼び求めなければならぬ人びとに、ご自身の姿を示される（マタ一一25）。

天におられる

われわれは通常、マタイによる祈りのことば、天におられるわたしたちの父、という祈りのことばを口にする。しかしこの「天におられる」ということばには、異なるレベルのいくつか

の意味がそなわっている。⁽⁴⁰⁾ その一つは、御父の遍在を強調していて、特定の聖なる場所あるいはひとつの民、人類の一つの集団に結びつけられて存在しているわけではないということである。神は、神殿に住まわれているわけでもなければ、シオンの山に、あるいはシナイ山に、あるいはその他の山、また砂漠におられるわけでもない。そうした場所を超えたところに、しかし同時にそうした場所にもいらっしやって、すべての人びとに父としての思いやりをさずけていらっしやるのである。

こうした解釈で強調されているのは、御父の独自性、唯一無二性、である。それは、家庭の父、信仰の父、あるいは国の父と称される人びとと比べても問題にならない高みにある存在であり、むしろこうした父、家庭、国も、御父があつてこそその名を持つことになったのである（エフェ三14～15）。唯一の子、イエスが語られているように、「あなた方の父は、天の父おひとりだけ」（マタ二三9）である。

しかし「天におられるわたしたちの父よ」には今ひとつ、もっと深い意味が含まれていると見ることができる。その神学的解釈は、この表現は御父の至高性と超越性を示しているという。御父は一方で、心優しく、慈愛に満ちた、われわれの身近に存在される方であるが、同時に「きわめて異なる」存在でもある。この御父が現世のさまざまな父たちと混同されないのは、この方が人の子の父の単なる延長上にいらっしやる方ではないからである。確かに御父はわれ

われのすぐそばにいらっしゃる。そしてわれわれの生に、あるいは苦しみに、深い関心を抱いてくださっている。それでもなお、われわれとは全く隔絶された、別世界のお方である。天上に「住む」お方なのである。

「天」とは、はるかなる昔に生きた人びとの文化では、超越したもの、超絶存在のシンボルであり、人間がいかに頑張っても手にできない永遠なるものの「別名」であった。それゆえ、「天」はやがて、至高と栄光の存在、人の手の届かない光である神と結びつき、その原型的シンボルとなった。

神がわれわれの身近に存在するのは父なる神であるからなのであるが、きわめて近くにおられるので、われらの御父、なのである。しかしこの神は、何があっても自分を守り通そう、とにかく自分だけは慰めを得よう、と考えるわれわれの幼児的な欲求の自己中心主義をおおい隠すためにかつぎ出された人形ではない。この神は、われわれに自分自身を忘れるよう、われわれ自身の欲求、利益を忘れるように呼びかけ、地上の善悪を越えた意味をもつ王国にわれわれを迎え入れようとしている。

神であり、父である方に近づくのは、当初思ったほどにはたやすいことではない。その道のりは厳しく、つらく、辿っていくには大きな勇気がある。すでに述べた通り、この骨の折れる道を前進するには、信仰と希望と愛が必要であり、この世の多くの不合理、矛盾に耐えていく

力が必要である。そしてそれらと共に、「アッバ、父よ」と呼びかけることも。つまりわれわれは、この世をサタンの国から神の国に変えるべく闘うよう求められているのであり、だからこそ「わたしたちの父よ」と祈ることが、いっそう現実味をもっているのである。こんなにも身近で、しかも遠く隔つてもいる神だけが、われわれに天に導かれる地上の生のあり方を見出すよう助けるのである。地上ではなく、天こそ、われわれの安住の地なのである。⁽⁴¹⁾

神は圧制や弾圧、歴史的悲劇の存在するこの世界ではなく「人間存在の炉辺、故国」を建設する。父という觀念から生じうるいかなる「保護」また「世話」も、この終着点「神の国」を目指していかないのであるから、「父という名は」神学的には「われらの主イエス・キリストの父」「イエスの父」と呼ばれてはじめてその資格を得る。「天におられるわたしたちの父よ」の祈りは、われわれが死と壊滅を免れない存在であることから来る妨げをもとせず、すでにわれわれの間に、愛と思いやりと交わりの王国を建設し始めていらっしやる方こそ、生きたまことの神、近くて遠い神であるという事実を信じ、宣言していることを基本的に示しているのである。

父不在の世界でどのように主の祈りを祈るべきか

われわれは現在、主の祈りを祈るに際して幾多の困難を感じるが、その原因はどこに求められるべきであろうか。主な原因として、四つの障害を数えることができる。生の意味が深刻な危険にさらされていること。父不在、あるいは父性不在の社会の出現。フロイト、ニーチェなどの思想家による宗教における父親像やその機能に向けた批判。そして最後に、父親像に対するわれわれ自身の文化内の相対性を知ったことである。こうした障害を乗り越えることができるれば、われわれは信仰の道を浄めて主の祈りを唱え、この祈りの完全な解放の意味を回復することになるだろう。

ある人びとは、人生の否定的な様相にショックを受けたあまりに、信仰や希望をすっかり失ってしまっている。そして、天を見上げ、主の祈りを祈るなど、全く意味のないことと思っている。彼らにとって、主の祈りを唱えるのは、偽善であり、実際、偽りになる。彼らには、神が父として体験されないのである。*Fata nos ducunt*「運命がわれわれを導く」と古代の人は言った。つまり、われわれは運命に導かれる。目が見えずにわれわれは見知らぬ力によっ

て動かされるのだと。

また、他の人々は、この世の抑圧に抗する闘いに参加しながらも、生の不条理の重圧に耐えかねて、あるいは人間の尊厳、正義に反する歴史的暴力に直面して、無力感に打ちひしがれている。彼らは、人間性を回復し自由を得る可能性についての確信を失ってしまったのである。彼らは言う。われわれは「力こそ正義」の法則のもとに置かれて、相互に滅し合うように永遠に定められている——と。その一方で彼らは、友愛を求め、自由を渴望し、平等を願うという夢に常に悩まされているのである。冷笑主義も絶望も、等しく信仰を殺す。あきらめた者は、神の前で語ることばを持たない。口にできるのはわずかに、神についての疑問だけであって、祈願でもなければ、嘆願でもない。

これは恐るべき誘惑であり、信心深い人々のもとにさえやってくるのである。信仰の道を歩むにあたって、宗教的心情主義の段階を超えることに成功している者はその誘惑に勝てるのである。宗教的心情主義とは、まさに、その心情の上に建てられていて、保護を願ひ、罰を恐れることから発している。⁽⁴²⁾その歴史は古く、われわれが心を持ったときから、社会が成立したとき、その芽生えが見られる。神がこの限界内に住まうとすれば、この神は保護を与える父、あるいは罰を与える裁き人としてのみ、父と同一化されて理解されることとなろう。神はその神性を奪われ、人間の必要に応じて道具とされるだろう。

実を言えば、現実には、われわれ自身、こうしたことを防ぐことは出来ない。われわれに出来ることといえば、せいぜい抵抗するか、耐えることである。神はわれわれを危険な荒波から引き上げては下さらない。しかし、勇気を与えて下さっている。もし神が、われわれを波間から救い上げるためにだけ存在し、危機にあるわれわれに勇気を与えなければ、おそらく、われわれの希望が死んだ時、あるいはわれわれの生存のバランスが失われた時に、神は消滅するか、拒絶されるであろう。

すでに論じた通り、われわれの主イエス・キリストの父は、単に守り手である神ではない。神は確かにわれわれに慰めを与え、その子に同情の心を持っている。しかし、天におられ地上ではない。この距離は、常に真実である。ゆえに神は、天におられる父として受け入れられる時にだけ、われわれの父となる。すなわち、われわれは自由に決断された信仰によって依存的なものでない独立した子としての関係を築くことによってのみ神に近づけるのである。信仰はわれわれに、神の善を受け入れるよう促すと同時にこの世の悪を受け入れるようにと促す。この地上を越えたところ、天上に、あらゆるものの意味が存在するのである。このあらゆるものの、の中には、われわれの胸を引き裂き、今もわれわれの目に涙をあふれさせる矛盾、悲劇も含まれている。われわれが苦しみにさいなまれていても、それでもなお、神はわれわれの父であり続ける。われわれの自由になされた決意のゆえに、われわれはすでに、宗教的心情の分野

においては勝利をおさめ、信仰の王国を発足させている。ここには庇護を切望する奴隷の境遇から真に脱出しそれをこえる生の自由がある。それは「呪いをお前に」という世界から、「あなたに恵みを」という喜びの世界への出国である。

主の祈りを祈るにあたって、以上のような信仰が求められる。この信仰はイエスによって明らかにされている。イエス自身、十字架にかけられるという絶望の極みにあっても、神を信じて疑わなかった。矛盾、迫害、断罪にもかかわらず、イエスは神に忠実であった。

次に、われわれは今、ある人びとが指摘するように、「父なき社会に向かっている」⁽⁴³⁾。現時点の文化はまだ家父長的であるが、それは深刻な危機にさらされている。科学技術が急速に進展した結果、父性的な支配形態の維持が不可能となりつつある。働く父親像の影が薄れているが、それというのも、働く父親の姿が、ますますこどもの目に届かなくなってきたからである。家庭と職場の距離の隔り、労働職種の分化と多様化、賃金労働者の身分など、全ては父親の権威を失墜させてきた。父親は社会の機械化の中で単なる歯車ではない。社会体制はもはや、父親——社会秩序のシンボルまたそれを保証する個人としての父親に具現化せず、父親は機能を果たす職業人となり、その他多勢と並んで伍することとなった。「家父長制社会は、父不在の社会、あるいは個性を持たない仕事を顔を持たない力によって指示されて行う対等者の社会に取って代わられた」⁽⁴⁴⁾。これは不思議でも何でもない。社会が成熟すれば、人間の進化に

も新しい局面が開ける。そして父親も何ら恨まれることがないにしてもお払い箱になるのである。

こうした状況下において主の祈りを祈るとは、どんな意味合いからであろうか？　すでに時代遅れとなった文化の枠組を永続させるためであろうか？　われわれの社会は徐々に、非人格的で平等を重視する社会に移行しつつあるが（そしてそれは、世界の求めることなのであるが、この点についてはここでは言及しない）、まだ「父の姿」が完全に消え去ったと認めることは出来ない。われわれは、家長制秩序の核となるモデルを求め、父性の人類学的原則を探し出さなければならない。歴史的社會にあらわれる父性の形、すなわち社会組織の軸として示される父性の表現形態は、時により、場所により、一様ではないかもしれない。しかし、社会的に具体化された特殊な形態に尽きない父性というものが人類には絶えず存在している。その機能は、奪われることのないものであり、母と子の親しい結びつきの間に最初に割って入るものであり、こどもを社会へ、外界へといざなう責任を負っている。父親像は消滅を運命づけられていたのではなく、変化する社会、世界に応じて新しい役割を担うのである。それはこどもたちの心理の奥底に根つき、物事の判断の羅針盤として働く。こどもたちはこの羅針盤によって、世界と同化したり、世界を拒絶したりして世界と折り合いをつけるのである。⁽⁴⁵⁾

フロイトは、人間は誰しも自分の父親のイメージから神の観念を作りあげていく、と主張し

た。人と神との関係は、彼が自分の父親との間にもった関係に応じて形作られるというのである。もし父親が変化する社会に生きる一員として、必要な誠実さ、満足すべき忠誠心を持ち、こどもが必要とする保護を保証する責任を持ち、それが、こどもの自我を成熟させるなら、その時父親は模範としての機能を再びになることになる——そして家父長時代から引きついできた、この機能を損なういかなる邪魔物からも自由になるだろう。すなわち彼は人間社会において父親像に固有の構成素の内部でその機能を再び働かせるであろう。この人間に備わった基盤は、こどもにとつてのスプリングボードであり、これによって、こどもは神を、自己保存本能を満足させる鎮静剤としてでなく、大人の信仰の証しとしてそのイメージを発展させていく。この神は、内なる夜の闇の中にあっても、あるいは、名状しがたい苦しみ、悲嘆のさなかにあっても、父なのである。

こうした考え方は、ニーチェやフロイトといった懐疑の大家によって提起されるいまひとつの困難を理解し、そして解決するのに力を発揮する。⁽⁴⁶⁾ 彼らは、この父なる神の信仰を多方面から批判してきた。人間存在の深いところで働く二つの衝動、すなわち欲求と恐怖という二つの要素について、聖書解釈学はこれを隠したり、正面から取り組むことを回避しているという点である。すなわち彼らは、安全と保護を得ようとする人間の欲求、ならびに恐怖を克服しようとする心理的メカニズムにより、欲求と恐怖をうまく隠してくれるものとしての言葉すなわち

宗教を生み出したと。そして、宗教を信じる者たちは、ここに逃げ道を見出していると言う。

人びとは神を信じ、神の恵み、赦し、守護、救いを論じるが、そんなものはすべて幻想である。彼らは、自分たちの心の奥底にある原初的衝動に逃げ道を与え、懐柔しているに過ぎない、と。分析者の疑い（フロイトやニーチェのような）は、人の心の中に隠されたものを、必ずや探し出し、意識され正当とされた意味をもつものと無意識の要素を分離することが出来るに違いない。そこでニーチェにとつて、宗教、なかなずくキリスト教の起源は、弱者が強者に抱く憤りにある。宗教は、人間の無力感と欲求不満から生まれ、ある種の「貧者のプラトニズム」として出現したのである。そこでは価値が逆転し、弱者が強者となり、無力の者が全能の力を持つことになる。そして神ははりつけにされ、敗北する——と。⁽⁴⁷⁾

フロイトも、類似の解釈をおこない、宗教とは、集団的幼児的神経症であり、神とは「幼児が感じる寄るべのなさを補償する投影物」であると主張する。⁽⁴⁸⁾ 神（父）とは、自分の父親の代理となるものであり、それにすぎることによって安心と慰撫の感情を獲得することができる類の欲求の投影であり、つまりは幻影であると。人間は、快楽（欲求）原則と縁を切り、現実原則（*amor fati* 運命を受け入れる）を受け入れた時に自由になる。

フロイトはまた、人間はみな、エディプス・コンプレックスを通過すると主張し、万人に起こることであるがために、このコンプレックスにとらえられることが問題なのではなく、人間

性を保つ方法で、どのようにこのコンプレックスから脱け出すか、また個人の人生計画にどのように統合させるかが問題なのであると主張している。すなわち、このエディプス・コンプレックスの基本的な性質において、それは誇大妄想や全能感にあらわれる欲望の基本構造を持っている。欲望に限界はない。エディプス・コンプレックスは、こうして、空想の中で理想の父親像、つまり息子によって求められるすべての価値の支配者としてのイメージへと変形される。かくして息子は父親を模倣し、彼に魅了される。父親のようになりたいと思う。しかし、この願望はどう実現されるのであろうか？

エディプス・コンプレックスから抜け出る方法は多様である。抑圧、同一化、昇華などは、いずれも不完全な方法であり、これらによって目的を完全に達成するのは不可能である。エディプス・コンプレックスから脱け出す一つの方法はエディプス・コンプレックスによってもたらされた幻影を破壊（解体つまり破壊）することである。この作業は、自分の父は結局有限な（限界のある）存在である、そして父はその息子と異なっている、ということを経験することによって完了する。すると息子は決して父ではなくなるのであるうし、父親が父親として受け容れられるに違いない。つまり、こうして息子は真に息子となるのである。これは、人間の欲求の抑圧ではない。むしろ、こどもの時に抱いた全能感の仮面をはぐことである。かくして息子は、自分が父親の子であることを否定することなく、父性像を内面化することができる。つま

り彼はここにおいて、彼自身生得の権利で、父となり、人間としての成熟を達成するのである。このようにして、エディプス・コンプレックスは、その統合において精神の中に再び取り込まれるのである。⁽⁴⁹⁾

われわれは、近くて遠い父、すなわちわれわれの父であると同時に天上におられる父としての神の体験の、弁証法的な構造を、論拠をもって概観してきたので、フロイトとニーチエの批判に答える用意がある。われわれは、神を父とする信仰に、この世の苦しみを逃避し、そして強引に慰めを探し求めるという病理的側面があることを認めないわけにはいかない。この点についてわれわれはこの二人の懐疑の大家が行なった批判を受け入れなければならない。二人は、真の信仰を淨める業を行なっている。

他方、この問題を注意深く検討するなら、われわれは次のことに気がつく。すなわち主の祈りを実際に祈るに際して求められる信仰は、われわれを奴隷状態にとどめる小さなこどもの未熟さからではなく、大人の自由をもって「アッバ、父よ」と呼びかけようとするわれわれをさえぎる原初的衝動としての欲求、恐怖から、われわれを解放しようとする。聖パウロも、われわれはもはや「未成年であった時（のように）、世を支配する諸靈に奴隷として仕えて」はいない（ガラ四3）と力説している。すなわちわれわれは、欲求や恐怖の奴隷ではなく、成人としての神の子なのである。われわれが父である神との間に築いた関係は、こどもじ

みた、神経症的な依存の気持ちから生じたのではなく、自立的に、自由意志をもって下した決断から生み出されている。

われわれはイエスにおいて、このエディプス・コンプレックスを統合した態度が、完全に輝き出ているのを見る。御子は、御父の存在ゆえに無氣力に生きるといふことはなかったし、彼の気持は御父に依存して動かないというものではなかった。それどころかイエスは、自らの使命をわきまえ、自らを子とみなす一方で、父は天におられる父であると明確に認識していた。幼児のように全能の力を夢みることもなければ、父にそなわる特権、名譽をわが身にもと望みもしなかった。自分自身を知り、自分が子の立場にあることを受け入れていた。⁽⁵⁰⁾ イエスは一方で、自分は父からあらゆるものをさずかっている(ヨハ一七7)と理解し、他方で、父との間に存在する愛と親しみの関係を通して、神と一つであることを確信していた(ヨハ一七21)。この、子であるイエスと神との自由な関係は、父である神が他の人間と持つ関わり方を明らかにしている。イエスは、これ以上のものはない、自由で開かれた関係を、すなわち他のために自らの生命をも犠牲にする愛の関係を、身をもって示している。縦の方向で働く関係の力学は、横に働く関係の原動力として現われている。すなわち人間の解放は人間と神との関係と矛盾するものではない。イエスが神との間に深く固い結びつきを持ち得て、しかも地上の男女と根源的に結びつけられていたことが、それを物語っている。言いかえれば抑圧からの人間の解

放は、必ずしも父なる神の觀念からの解放を意味するものではない、ということである。

かくして、キリスト教は強者に対する弱者の憤りを起源とするのでないことは明らかである。キリスト信仰は、あきらめと忍従、欲求不満の信仰ではなく、高潔と尊嚴の信仰、両極端に位置するものの両方を維持しようとする勇氣の信仰、すなわち天への信賴と地への信賴を持ち続け、希望に希望をつなぐ信仰である。キリスト教は、その起源において、奴隸の信仰、社会の外縁に押しやられて生きる人びとの信仰であった。しかしこの信仰は彼らに、奴隸、あるいは外縁の民であることを強いなかった。自由をつかむように、人間としての尊嚴をそなえた新しい姿に生まれ変わるようにと、彼らを導いたのである。

さて、いよいよ第四の問題となったが、ここに横たわる困難は、父の像と男性向きに集中したわれわれの文化の歴史的意識と深い関わりをもっている。神に父と呼びかけるということは、単に、はかない像〔人間としての父〕を讀えることなのであるか？ また神を「天におられるわたしたちの母」と呼ぶことは不可能なのであるか？ こうした問いは非常に困難ではあるが人びとの好奇心を刺激しないではおかない。ここではこの問題をわれわれの欲するままに細部にまで立ち入って論議するのは控えたい。⁽⁵¹⁾ただ、このことだけは述べておきたい。すなわち、われわれはキリスト教信仰で主の祈りを祈る際に神を父と呼びはするが、その概念は、男と女という性別用語で限界づけられるものではない。われわれの抱く一つの確信は、こ

の世のあらゆる現実の底には、他の原理原則の規制を受けない一大原理があり、その一大原理はあらゆるものの源であると同時に、それ自身については何によって生じてきたか、その原因を持たない原理である、ということである。さらに進んで次のように言うことができる。この大原理は、底なしの穴でもなければ、無限の虚空でもない。愛と霊的交わりに満ちた存在である。この父が子を持ち、それとあわせて聖霊を生じたのである。

教会の教父たちが主の祈りについて注解書を著した時、彼らは最初の行において三位一体に出くわしたのである。その理由は、基本的には、われわれに「アッバ、父よ！」と言わせるのは御子イエスの聖霊だからである。さらに、「父」と呼ぶことは、自動的に御子の実在を呼びもとめることである。御子イエスの内にあつて「子とされたがゆえに、われわれは御父と呼ぶ」と、主の祈りの注解の中で聖キプリアヌスは述べている。⁽⁵²⁾ テルトウリアヌスは、更に範圍を拡張して母なる教会を取り入れた。「われわれは御父の内なる御子に祈願する。なぜなら、わたしと父は一つである（ヨハ一〇30）」と御子が述べられているからである。しかし同時にわれわれは、われわれの母である教会を忘れてはならない。御父の名を、そして御子の名を呼ぶということとは、母を宣言するということである。その母なくして、御父も御子も、存在しない⁽⁵³⁾。

かくしてわれわれは、「父よ」と言うとき、われわれの存在する世界をつらぬく究極的な神

秘を、すなわち愛と靈的交わりの神秘を、告白している。父性的シンボルによって表現されるこのリアリティは、同じように母性的なシンボルによっても示される。現に旧約聖書においてさえも、神の母性的側面が、わずかではあるが記載されている。「母がその子を慰めるように、わたしはあなたたちを慰める」(イザ六六13。さらに同書四九15をも参照のこと)。教皇ヨハネ・パウロ一世もまた、神は御父であるがそれ以上に御母でもあると述べた。ここではこの女性用語の意味を論じない。われわれの文化は家父長文化から脱するにつれて、男性化されたシンボルからも自由になり、女性的方向から神にアプローチする道が切り拓かれつつある。女性や母性もシンボルとして価値があり、万物の誕生を促す愛の神秘の信仰を表現するシンボルとして、格好のものである。父と母、いずれの表現も、同一の根源的リアリティを指しているのである。

われわれは今日、主の祈りをいかに祈るべきであろうか？　ここで求められるのは、イエスが御父に呼びかけた時に心に抱いていたのと同じ精神であり、そして最初のキリスト教殉教者たちがこの祈りを祈った時に示したあの勇氣である。苦痛の極限に置かれたイエス、殉教者たちは例外なく、全能の神であり、慈悲深い父であるあの方に向かって、心からの呼びかけをおこなった。

イエスは、牧歌的な人生を送ったのではない。彼の実存は、重大な約束であり、彼はその闘いに圧迫され、それは十字架上の死に極まったのである。こうした苦悩と責め苦の中で、御子は最愛の父に祈ったのである。⁽⁵⁴⁾ その最後の時に、イエスは、誘惑から免れるよう、あるいは苦い杯を取り去るようには願わなかった。あくまでも父の意志に忠実であることを求めた。彼にとっても神は、身近な存在であると同時に、遠い存在であった。十字架上のイエスは、この上ない苦悶と悲嘆を体験したが、それはイエスが父の不在に直面したことをあらわしている。しかし、そうした状況に置かれながら、彼は同時に、神を間近に感じていた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」(ルカ二三46)。

キリスト者は、主の祈りを祈るにあたって、その凝視を後方に向け、先人たちの生きた過去を求めるのではなく、遠く天におられる御父によって約束された王国の到来する方向、前方に向けるべきである。前方を見る視線、そして天上を見上げる視線は、遠くにおられる父である神を愛する一方で、近くにおられる神である父とともに喜び、愛を信じ、希望し続けるという態度を表現する。この態度は、われわれを神から遠ざけることもないし、われわれから人間性を奪うものでもない。それは、最愛の父の前で息子として、あるいは娘としてあるという、最も適切にして素晴らしい位置にわれわれを置くのである。